



日本の国名を 考える



湊 學季

日本の国名を考える

漢字が伝来していなかった古代日本の国名は、一体どうだったのだろうか。古代史に出てくる倭国とは、漢字の発祥国中国が名付けた国名であって、漢字がまだ伝来していなかった時代の我が国の自称ではない。しかし古代日本に自国を名乗る名称がなかったということにはならないであろう。

そこで考えられるのが「ひたかみのくに」なのだ。これは「日輪を天空高く仰ぎ見る国」という意味であり、言葉でしか表せないから長たらしい呼称なのである。これはまさに日の真下に暮らせることに、この上ない幸せを感じる、まさに太陽信仰ならではの国民性を表している同義語と考えられる。

太陽信仰国は他にもあるであろうが、今でもご来光に手を合わせるような太陽崇拜国は他にはない。また森羅万象に畏怖し神として崇めることなど、我が国の信仰は教義のないものにまで及ぶ。そのように太陽を崇める人々の国、「日高見の国」は我が国において他には考えられない。そこで漢字伝来後に漢字のもつ意味を理解するにつれ、国民性をむき出しにして表したのが、太陽の真下に暮らすとした日下（ヒノモト）であったが、後述のように太陽の運行に合わせて、真下から日の上るを、日出ずる国として（モト）を本にし、日本（ヒノモト）となり、本の読みも理解が広がって、（ニッポン）へと変わっていったのではないだろうか。しかるに日下を（クサカ）と読むことについては分からない。国旗が日の丸になるのも当然のことなのである。

私には日高見の国に蝦夷を連想したり、北上川を連想するのは根拠もなく、的が外れているように思えるのだ。そのような太陽を崇拜する国民性は、方位に対する認識にも特別な拘りがあったであろう。それは漢字の伝来当時の方位、東西南北のうち南ではなかったかと思えるのだ。南が基準ということである。これはあくまで古代の日本のことである。地球規模で見れば日の上がる東を基準に考えるのが、一般的な方位のとらえ方であろうが。このことに関する裏付けとしては、日本書紀成務5年の記事として、「東西を日の縦とし、南北を日の横」に定めたとあることである。この記事に心を止める人がいるか否やは知らないが、書紀にある虚の年代を、私が見出した実年代に変換してみれば、（『改竄された記紀と古代日本』参照）、成務の在位は西暦で419～438年になる。なお成務5年が意味を持つか否やは分からない。

この記事の意味するところ、成務大王以前の日高見の国の方位は、違っていたということになる。そこで考えられるのが東と南との入れ違いなのだ。要するに東（日が上がる）と南（日が高く上がる）とを、取り違えていたということだ。どのようなことかと言えば、一般的に方位の認識は太陽の上る方角を基準にして捉えられるであろうが、日高見の国の人々もその方位に対する呼称はあったであろう。ヒガシ・ミナミ・ニシ・キタなる呼称は古代から現代まで引き継がれた言葉ではないだろうか。呼称があるとき突然変わるようなことは考えられない。そのようなときに中国から漢字が我が国に伝来した。そこには方位を表す文字があり、その説明を受けた。東（トン）南（ナン）西（シャ）北（ペイ）なる時計方向に回転する方位を表す漢字である。問題は

呼称に対する文字の当て方である。それはヒガシとミナミとの混乱であろう。太陽が昇る方向と、高く昇った方向との誤認ではなかったか。我が国は太陽崇拜国でありミナミ第一であるから、そこに東なる文字を当て、反時計方向に90度づつ回転させさせたのではないかと考えられるのである。世界的には太陽が昇る東が基準であろう。ところがである。太陽崇拜国の我が国は、何が何でも太陽が天高く昇るミナミが第一であるはずだ。そこに東なる文字を当てミナミと呼んでいたのではないだろうか。であるから日常の会話には何ら不都合はなかったはずだ。

問題は文字であるから地図のようなものに記した場合の混乱だったのではないか。特に魏志倭人伝にある方位では、倭国の本州内陸部に遠く入り込んだ、船で行くような方位に混乱がみられるようである。これは当事者が現地に行かず、倭人から聞いた話なのではないのか。それはミナミが東なる文字で記され、反時計回りに90度回転したヒガシが南とされ、順にキタが西・ニシが北と記された取り違いであろう。太陽を真上に見上げるミナミを基準とした国民性の為せる迷いである。これが日高見の国の方位観になるのである。まさかと思われるかも知れないが、そうとでも考えないと国史である日本書紀の、成務5年の方位記事が生きてこない、無意味なものになってしまう。歴史上重要なことであつたから載せてあるのである。そのことが今まで思考の対象にもならなかったことが、歴史学の実態なのであろう。

またそう考えることにより、魏志倭人伝にある、末廬国から邪馬台国への方位の問題も解決することになる。なお沖縄地方でニシを北と言ったり、九州の松浦地方の方位を考えると、これが古代日本人の方位観の名残として、残っているような感じがしてならないのである。これは歴史学を学んだ歴史の専門家であろうと、私のような非歴史者であろうとも、現代においても彷彿として沸き上がってくる考え方ではないだろうか。

この記事の意味するところ、成務大王以前の日高見の国の方位は、違っていたということになる。そこで考えられるのが東と南との入れ違いなのだ。要するに東（日が上がる）と南（日が高く上がる）とを、取り違えていたということだ。どのようなことかと言えば、一般的に方位の認識は太陽の上の方角を基準にして捉えられるであろうが、日高見の国の人々もその方位に対する呼称はあったであろう。ヒガシ・ミナミ・ニシ・キタなる呼称は古代から現代まで引き継がれた言葉ではないだろうか。呼称があるとき突然変わるようなことは考えられない。そのようなときに中国から漢字が我が国に伝来した。そこには方位を表す文字があり、その説明を受けた。東（トン）南（ナン）西（シャ）北（ペイ）なる時計方向に回転する方位を表す漢字である。問題は呼称に対する文字の当て方である。それはヒガシとミナミとの混乱であろう。太陽が昇る方向と、高く昇った方向との誤認ではなかったか。我が国は太陽崇拜国でありミナミ第一であるから、そこに東なる文字を当て、反時計方向に90度つつ回転させさせたのではないかと考えられるのである。世界的には太陽が昇る東が基準であろう。とこがである。太陽崇拜国の我が国は、何が何でも太陽が天高く昇るミナミが第一であるはずだ。そこに東なる文字を当てミナミと呼んでいたのではないだろうか。であるから日常の会話には何ら不都合はなかったはずだ。

問題は文字であるから地図のようなものに記した場合の混乱だったのではないか。特に魏志倭人伝にある方位では、倭国の本州内陸部に遠く入り込んだ、船で行くような方位に混乱がみられるようである。これは当事者が現地に行かず、倭人から聞いた話なのではないのか。それはミナミが東なる文字で記され、反時計回りに90度回転したヒガシが南とされ、順にキタが西・ニシが北と記された取り違いであろう。太陽を真上に見上げるミナミを基準とした国民性の為せる迷いである。これが日高見の国の方位観になるのである。まさかと思われるかも知れないが、そうとでも考えないと国史である日本書紀の、成務5年の方位記事が生きてこない、無意味なものになってしまう。歴史上重要なことであったから載せてあるのである。そのことが今まで思考の対象にもならなかったことが、歴史学の実態なのである。

またそう考えることにより、魏志倭人伝にある、末廬国から邪馬台国への方位の問題も解決することになる。なお沖縄地方でニシを北と言ったり、九州の松浦地方の方位を考えると、これが古代日本人の方位観の名残として、残っているような感じがしてならないのである。これは歴史学を学んだ歴史の専門家であろうと、私のような非歴史者であろうとも、現代においても彷彿として沸き上がってくる考え方ではないだろうか。

日本の国名を考える

<http://p.booklog.jp/book/124383>

著者：湊 學季

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/abinagasunejp/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124383>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト